

春秋季刊誌『グリオ』から学ぶもの：GN21の前史

北島義信

19

80年代後半期から世界は目まぐるしく大きく変化し始め、ソヴィエト連邦・東欧体制は崩壊に向かった。崩壊に向かったのは、南アフリカの悪名高い「アパルトヘイト」体制についても同様であった。戦後続いた「米ソ二大国時代」・「冷戦時代」（このような世界の捉え方には、イスラーム世界の認識の欠如がみられるが）がようやく終わり、多元的多局的で平和な新しい時代が始まるかにみえた。しかし、「湾岸戦争」の勃発は、その「期待」を打ち砕いた。このような時代背景の中で、『グリオ』は生まれた。

現代アフリカ文学を学んでいた私は、1980年代の後半に片岡幸彦先生からお誘いを受け、『アパルトヘイト—南アフリカの現実』（1987年）の執筆に加えていただいた。執筆にかかわって、南アフリカの文学やルポルタージュを読む中で、「南ア黑人一般」ではなく、生身の固有名詞をもった個々の人間がアパルトヘイトと闘う生きざまに深い感銘を受けた。

それは、私自身が学生時代にヒンディー文学を読んだ時の感銘と同じものであった。不幸なことに、日本ではアジア、アフリカ、中東、ラテンアメリカの民衆が具体的に何と向かい合い、どのように生きているのかを示してくれる文学作品を恒常的に読むことは、困難であり、多数の人々の目にはとどかなかつた。21世紀に向けて、このような、いわゆる「第三世界」の文学の紹介を

通じてこそ、われわれに根深く残っている「オリエンタリズム」的思考を打破し、未来への展望を考えることができるのではないか、またそれを担える人材もかなり存在しており、第三世界の文学を中心とした雑誌の発刊も可能ではないか、という私の思いを片岡先生に申し上げたことがあった。それは、私のみの思いではなく、「第三世界」の研究者の中にも、同じ思いの人々はかなりいたのであろう。「現代世界と文化の会」（春秋季刊誌『グリオ』、代表・加藤周一氏／編集責任者・片岡幸彦氏、平凡社発行）が1991年に誕生したのは、そのような研究者の主体的連帯の反映である。

この雑誌は、西アフリカの職業的詩人兼音楽家を指す言葉である「グリオ」と名づけられた。西アフリカでは、グリオは危機の時代においては自己の命をかけて警鐘を鳴らす役割を担っている。この雑誌の役割について、編集責任者片岡幸彦氏は次のように述べている。「（この雑誌の役割は）人類の遺産を受け継ぎながらも、既成の秩序や価値観が大きく問い直されている現代という時代を厳しく受け止めて、できればそれを克服しうるような新しいパラダイムやオルタナティブの構築に有効な素材を地球規模で集めて、みなさんに提供する、そしてわれわれ自身も大いに自由に論じることにある」（『グリオ』創刊号編集後記、1991年4月）。この雑誌に参加した人達は、自ら現代のグリオになろうとする人達であった。

『グリオ』は、「第三世界」（「第三地域」）を中心的に扱っていた。それはつまり、「支配される側、見られる側、客体化される側の社会」であり、そこで扱われる「課題は被支配者の内側への接近であり、見られる側から見ることであり、主体—客体関係の主体—主体関係への転換である」と加藤周一氏は、上記創刊号で述べている。『グリオ』は、「第三世界（第三地域）」の文学を紹介することを主要な目的としているが、その理由は加藤周一氏によれば、「それらの地域とその文化を、外からだけではなく内から知りたい、とわれわれが願うからである。

（中略）われわれはそこに人それぞれの顔を識別し、個別的な人間の喜びや悲しみに共感し、つまるところ主体としての人間を認めるだろう。（科学のように）対象化し、観察し、分析することを超えて、彼らとの主体—主体関係へ向かう道がそこに開けることをわれわれは期待する」からである。

われわれは「第三世界（第三地域）」の文学紹介・研究を主たる切り口として、21世紀に向かって、既成の秩序・価値観の問い直しと新しいパラダイムの提起を目指した。「現代世界と文化の会」は、当初50名の会員で出発し、最終的には113名にまで増加した。これらの会員の多くは、中東世界、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ世界を研究対象としており、シンポジウム等を通じて、学際的研究も大きく前進した。『グリオ』には毎号、吉田ルイ子氏を初め長倉洋海氏、大石芳野氏などの新進気鋭のフォトジャーナリストによる、「第三世界」の現場からのフォトレポートも掲載されていた。『グリオ』は1991年から1995年までの5年間に、10巻を発行してその使命を終えた。その主たる理由は、90年代以降進行し

てきた読書人口の急速な減少による、出版の「採算」問題であった。しかしながら、5年間の活動の中で築き上げられた研究者の連帯と課題の明確化は、その後も受け継がれることになった。

『グリオ』の活動の中で明確となった課題としてあげられるのは、「グローバリゼーションとは、いかなるものか」、「欧米近代の思想的・文化的問題点とはなにか」、「近代をどう把握すべきか」であった。1995年以降、旧『グリオ』の会員の間で、この課題を深めるための研究会活動が開始され、そこには新たな研究者の参加もみられた。この成果は『人類・開発・NGO』（新評論、1997年）、『地球村の行方』（新評論、1999年）、訳書『オリエンタリズムを超えて』（新評論、2001年）となって現れている。

『グリオ』がかかげたパラダイムの課題も、「GN21」では、「下からのグローバリゼーション」の事例としての「地域おこし・まちづくり」研究として進行している。

われわれの活動の中で、多岐にわたる多くの重要な課題が現れてきた。それらを「地球村」の現実化へと再統合して行くことが必要であり、そのためには、今一度、人々の現実の姿、とりわけグローバリゼーション支配の下で苦しめられつつも、それを打ち破らんとするエネルギーを「第三世界」の人々から学ぶことが必要である。近年のノーベル文学賞の受賞作家の主流が「第三世界」の作家、及び「先進国」における「第三世界的現実」の下にある作家、であることをみてもその力強さは明らかである。課題の総合化をはかるためにも、その近道である「第三世界の文学」を学び、紹介するという、『グリオ』の出発点の思想に再度立ち返ることが必要である。（GN21理事長）

